

2022年度 事業・活動報告書

一般社団法人 OHANA

昨年に引き続き、今年度も感染症対策を徹底しながらの活動をしなければならなかった。また、オンライン等の非対面のツールを取り入れた相談の実施を続行してはいたが、昨年に引き続き、限界を痛感した一年でもあった。昨年2月に勃発したウクライナ・ロシアとの戦争の影響により、生活に必要な光熱費、食材の値上げにより、公的支援（生活保護等）で生活している被害当事者の家計を圧迫し、オンラインに対応する端末の購入は困難になっていて、なかなか被害当事者の心や身体のケアまでたどり着く事が難しい一年であった。

また、昨年度の相談では「性被害」の相談だけでなく、家族関係や受けている支援担当者との人間関係等の相談も多かった。

昨年度の相談や支援の事案を振り返ってみると、本来の人間関係（家族・学校・職場・近所等）の希薄さが原因の一つであるのではないかと感じた。そのため、当団体では、「性被害」以外の相談も柔軟に受け入れ、各事業に取り組んだ一年であった。

1 ものづくり事業

・「ものづくり」というツールを通して、自分自身の気持ちを「形」として表現し、ありのままの自分を受け入れていくという「作業療法」を取り入れる事で、被害当事者の創造力を鍛えるような関わり方が実践できた。その結果として、不定期ではあるが、継続的にアトリエに通ってくる当事者の方がでてきた。

・湘南生活クラブから、イベント用のハンドメイド作品を受託出来た事で、自尊心を取り戻し、かつ楽しみながら作品作りに取り組む当事者の方の姿を見る事ができた。

・感染症が落ち着いたころに開催された小さな地域イベントにて、作った作品を展示販売する事で、一般の人達から思わぬ応援の言葉をもらい、勇気をだして就労に復帰しようという当事者もいた。

・企業からの助成金のおかげで、ものづくりのスペースの拡充と開室時間を延長する事ができた為、地域に住む一般の方も少数ではあるがアトリエを訪れてくれるようになった。

3 傷ついた心を癒すためのトラウマ回復事業

・当団体のアトリエ「OHANALABO」に来ることで、被害当事者以外の参加者と繋がるきっかけにより、自然に地域の人達と繋がりを持ち、少しずつではあるが、日常生活を取り戻す当事者もいる事ははととも以外な事であった。

4 法政大学と協働でソーシャルワーク研究会の立ち上げと運営。

- ・オンラインを使った「SW 研究会」をほぼ定期的実施する事ができた。(夏休み、年末年始除く)参加してくれた大学生や教授達から、社会福祉の実習先での経験や専門的な社会福祉(重層的支援)を発表、また教えてもらう事でしてもらう事で、こぼれ落ちてしまう支援体制の課題等が分かりやすく理解する事ができた。また、その課題に当法人が「どのように」「どこ部分で」必要な支援のフォローができるのかを考える事ができた。

5 週末緊急宿泊シェルター事業

- ・「性被害」に起因する精神疾患の当事者の利用が多かった。(薬の過剰摂取の恐れがある当事者)

- ・8時間を超える「長時間滞在利用者」がとても多かった。